

第2回子ども・青少年を健やかに育むための 文化・芸術振興に係る検討会 会議録

日 時	令和元年11月27日（月）17時から18時30分まで
場 所	ルビノ京都堀川2階 ひえいの間
委 員	新川達郎会長、伊豆田千加委員、上田静男委員、栗山圭子委員、 小崎恭弘委員、竹内香織委員、
次 第	◇ 議題 （1）論点について （2）意見交換

(1) 現状報告

事務局から論点について、資料を用いて説明。

(2) 意見交換

主な意見等

- 文化・芸術を土台として、心が豊かになることが、コミュニケーションスキルの向上や国内をはじめ海外でも活躍できる人材育成の土壌を作ることにつながる。
- まず、子どもたちを取り巻く社会環境が劇的に変化してきたことへの共通の理解を作るとともに、これからどう変化させたいのかという未来像の共有を行ったうえで、文化芸術によってどのような社会が作られると、幸せだと思えるのかについて議論する必要がある。
- 京都の文化で当たり前と想着ることが、他の地域によってはそうではないこともあるので、一方的な決め付けや押し付けはするべきではない。地域によってそれぞれの文化があるという幅広さが文化の豊かさだと思う。
- 文化・芸術を守り継承していくのか、あるいは変化してまた新たに違う形にしてい
くのか、文化・芸術は地域や時代とともに変動していく幅が広いもの。この幅の広さは、その地域やその時代の中で許容されてきたものだと思う。
文化・芸術でお金のお話をすることは駄目なことと言われることがあるが、福祉と芸術が融合した障害者アートを販売することなどはすごく面白い取組だと思う。文化・芸術については、様々な可能性を追求しながら、多様な視点の中で検討していく必要がある。

- 先人たちが、自然を大切にながら、豊かな生活を確保してきたことも伝統文化の一つの表れだと思う。

豊かな生活には経済的な豊かさもあれば、心の豊かさもある。文化・芸術は、これからの世代を担っていく子どもたちの内面的な豊かさを育む方法の一つとして活用できたらいいと思う。

- 今回の子ども・青少年をターゲットにした文化・芸術振興を検討する理由の一つとして、コミュニティが希薄化している中であって、多様な価値を認めることができる関係を作っていくということがある。それによって、将来、結婚や子どもを持ちたいと思う気持ちにも繋がるということがあると思う。

文化・芸術に関わることによって、将来、子どもたちがすごくいい子になるとか、社会的地位があがるとか、海外で活躍する率が高くなるとか、そういった前向きの意識がインプットできたら、親は子に文化・芸術に関わらせないといけないと思うかもしれない。

最近、小中学校で行われている、科学・技術の楽しさやプログラミングを教えるロボットクラブはとても人気がある。そこを逆手にとってロボットを芸術の中に入れてしまえば、それも芸術の発信になるのではないかな。

- 今回の検討に当たって、文化・芸術に関わっている人や関心のある人たちだけではなく、企業などを巻き込んで京都ならではの金銭の流れやアイデアを入れ込む議論のテーブルを作ることも考えてもよいのではないかな。

- 子どもは1人1人がアーティストで、表現の方法はいろいろあるが、内面から自分のことを表現する。一方で、周りの大人がそれを受けとめる感性や許容度がすごく低くなっていると思う。

現代社会の中で大人の余裕の少なさみたいなのが、文化を狭く捉えてしまっているのではないかな。

- フラワーアレンジメントをされている海外の方が素晴らしい花束を見つけたといって仏様にお供えする花を買ってきたという話を聞いた。海外では手に入れづらい艶々したシキミの葉が魅力的に映ったそう。それをけしからんと言う人もいれば、逆にそういう見方ができるのかと言われる人もいる。

私たちが仏様の花と思っているものでも、知らなければ、そうは見えない。そういった文化の違いを受け止められる大人の寛容さがないと、子どもの文化を育てていけないのではないかな。

- 京都は日本の和の伝統の地であることは誰もが知っていることである。残念ながら和服を着る習慣など、一定の文化・芸術が失われていくことも仕方がないという考える一方で、伝統文化を理解し、大事なものは守っていくという責任もあると思うので、

京都ならではのこだわりというものも議論していく必要があるのではないかと。

- 文化・芸術が、子どもたちに受け入れてもらえるのか、さらに次の世代に引き継いでいってもらえるのかどうかについては、子どもたちで決めてもらえばいいというぐらいの気持ちで、文化・芸術との出会いの場を作っていくことしかできないのではないかと。
- 文化・芸術がどのように定着してきたのかを子どもたちに分かってもらえるようにすることが、京都の文化を広めるのに役に立つと思う。そこには、地域社会や自然環境を思いやる人の心というものが大事となるのではないかと。そういうものを何とか伝えられるような展開ができればいいかなと思う。
- 自国の文化とか京都の文化の良さってというのは、異文化との出会いの中で知ることでもある。まずは、そこにあるものを素晴らしいと気づくことが大人も子どもも大切ではないかと。
- 子どもが幼稚園のお絵かきのときに、腕を三つ書いたら先生に書き直しなさいって言われたという話がある。果たしてそういう絵をどう捉えたらいいのか、どう評価したらいいのか。教育者への投げかけも必要かもしれない。
- 教育の現場において芸術プログラムをどのように指導されているかについては、なかなか難しいところではあるが、教育現場で先生がゆとりを持って子どもたちと一緒に楽しめるように持っていくことが大事ではないかと。
- 京都が持っている文化・芸術の空気感や雰囲気のようなものを損なわないような施策を行っていくことが大事だと思う。
- 伝統文化の持つ独特の美意識を伝えていくためには、子どもたちへの関心の持たせ方にまだまだ工夫の余地があると思われる。まずは関心を持たなければ、どんなにすてきなものや美しいものがあっても興味もわかないと思う。
- 文化・芸術への関心を持たせるためには、ナビゲーターやコーディネーターの存在が大事であるが、伝統芸能の世界においては教え方も含めて傳承されている場合もあるので、そこから外れられないこともある。
- 教えてもらう側の子どもたちも楽しんでやりがいを感じる事ができれば、覚えておこうという気持ちになる。そして、教える側もやりがいがあって、伝えられてよかったというように思えるような仕組みが大切だと思う。

- 文化・芸術の振興を検討する上で、多様な人々が互いに個性を認め合うインクルージョン（包摂）といった視点が大事である。
- 文化・芸術においては自然も大きな軸であるため、検討にあたっては地域のすばらしさや豊かな自然文化についても必ず意識していく必要がある。
- 京都に暮らす人の中には、歴史も自然も文化もないと思っている人もいると思う。しかし、何もないと思っているところにも実は存在しているんだという視点をもって、京都のどこの地域においても、これらの存在を伝えていくことが必要ではないか。
- 子どもたちは大人と全く違う文化を持っているっていうことをきちんと踏まえたいので、受け継いで欲しい文化を伝えていく必要があると思う。

会長まとめ

文化・芸術を多少なりとも身につけるといことは、その人自身の心の豊かさだけでなく、その人自身の生き方や他の人との関わり方、コミュニケーション力、そういうものを大きく変えていく、あるいは大きな力になっていくものであり、人生のいろんな場面でとても大きな力になると思うし、文化・芸術ではないところでも大きな力を発揮するはずだということをお示唆いただいた。

また、これまで大事にしてきた本当に良いものを、どう子どもたちに伝えていくのかについては、少しだけ長く生きてきた者の役割かもしれない。そのときに、伝えられるものを私たち自身がどれくらい沢山持っているか、あるいは、持っていなくても、いろんな人の力をいただいて、一緒に子どもたちに気づいてもらうというチャンスをどれくらい増やせるかが大事である。これによって子どもが本当に心豊かに育っていく、あるいは、文化・芸術の次の担い手になっていくというチャンスになるのかもしれない。

子どもたち自身が文化の担い手であり、芸術家であるという前提で、伝える側、伝えられる側がお互いに認め合い、楽しみを作りながら、文化・芸術振興を通じた更なるはぐくみ、さらには自然や歴史などが持っている多様性や包摂性といったことも考えていく必要がある。